

台風の構造と発生・発達について……………山岬正紀
 台風の数值実験……………北出武夫
 台風の解析と予報……………上坂慶正
 「ひまわり」から見た台風……………山下洋
 台風業務実験……………平塚和夫
 台風と災害……………奥田稜
 降水の確率予報……………立平良三・保科正男

第15回(熱収支と気候変動特集)1981年
 最近の気候変動と異常気象……………能登正之
 太陽放射と地球放射……………会田勝
 簡易日射計の考察……………会田勝
 気象衛星写真の見方……………柴田宣
 気候に影響する大気中の微量成分……………三崎方郎

第16回(海と山の気象特集)1982年
 生活と天気予報……………加藤久雄
 雷……………北川信一郎
 日本の山岳気象……………飯田陸次郎
 波浪予報の発展……………小野田仁
 海の浪の主な性質……………小野田仁
 海陸風と山谷風のシミュレーション……………荒川正一

第17回(新しい気象観測特集)1983年
 地球流体実験……………木村竜治
 境界層の観測……………藤谷徳之助
 人工衛星データ処理……………土屋清
 地震予知の現状……………長宗留男
 Nowcast……………池田学
 今後の気象衛星……………里見穂

第18回(天気予報と数值予報)1984年
 数值予報発展の歴史……………山岸米二郎
 天気予報の現状, そのシステム……………草野梓
 数值予報の最先端……………佐藤信夫
 大気大循環数值モデル……………時岡達志

異常気象レポート……………朝倉正
 衛星画像からみた大気中の諸じょう乱……………加藤政勝

第19回(地球をめぐる風)
 高層大気の大循環……………廣田勇
 高層天気図の話……………丸山健人
 <実習>高層天気図……………丸山健人
 局地的な強風現象……………相馬清二
 気象衛星から得られる風情報……………嶋村克
 日本周辺の地震発生の特徴と
 その予知の現状……………吉田明夫

配布価格

第9, 11回	1,000円
第14~16回	1,000円
第17~19回	1,300円

○気象学への手引	350円
続・気象学の手引	850円

○構造物の耐風性に関するシンポジウム論文集

第1回(1970年)	1,500円
第2回(1972年)	2,000円
第3回(1974年)	2,500円
第4回(1976年)	3,000円
第5回(1978年)	3,500円

○風工学シンポジウム論文集

第6回(1980年)	3,500円
第7回(1982年)	4,500円
第8回(1984年)	5,000円

○百周年記念事業関係

「天気」29巻4号(記念号)	(会員 850円) (一般 1,200円)
「気象集誌」60巻1号(記念号)	(会員 3,000円) (一般 4,000円)
日本気象学会100年史	400円

編集後記：春季大会も盛会のうちに終了した。しかしこの間に我々の身のまわりにはかつてない大変な事が起こった。

4月26日早朝、ウクライナ共和国チェルノブイリにある黒鉛減速軽水冷却型原子炉を使用した原子力発電所の4号炉が事故を起こして大量の放射性物質が空气中に放出された。当初この影響は局地的なもので日本にまで及ぶことはないと考えられていたが、5月3日から日本各地の降水や空气中の放射能レベルは急上昇し、ことに短寿命の放射性ヨウ素 (¹³¹I) が検出されるに至った。原

子力安全神話もろくもくずれ去った事をよく示しているが、気象学的には、もう一つ大切な事として、対流圏下部の物質輸送が今迄の常識と異なり全地球的なものであることを示している。大気中の Life-time が1週間以上のものならば、ヨーロッパで起こった事は日本に伝わり、更に世界をめぐるのである。1週間分の食糧と燃料をもってヨーロッパから日本への気球の旅をするという事も気象学の実験として考えられてもよいのではなからうか。(長)